「ごめんなさい…。」
僕は下着一枚を身にまとい、クラスメイトの前で土下座をしながら謝っていた。
「拓真、今日はもってこいつったよな？」
漫画やドラマでもよく描かれるカツアゲ、まさか自分がその標的になるなんて思ってもいなかった。そんなに多い小遣いをもらっているわけでもない僕が毎回カツアゲに応じるなんてできるわけがない。
「はい、でも…ぐあっ！」
腹に激痛が走る、思いっきり蹴られたのだ、口答えをするか気に食わない発言をすればいつもこうなってしまう。分かっているのに他の言葉が思いつかない僕はいつも蹴られ、殴られ。痣が消える日はない。
「親の財布からいくらでもパクれんだろ？なぁ、ごみが調子乗ってんじゃねぇよ。」
ヤンキーのトップ、龍治は今にも人を殺しそうな目で僕をにらみながら髪の毛を引っ張る。恐怖で何も言えないどころか、奥歯がガチガチと震える。
そんな僕を見て、ヤンキー集団とそれに付きまとうカースト上位の女子たちは笑いながら写真を撮る。
なんで僕がこんな目に合わなきゃならないんだ！心の中で何度叫んだだろう。
龍治は腹が減った、からと言って帰っていき、仲間たちも同じタイミングで帰っていく。
僕はボロボロになった制服を手に取る。
「いてっ！」

蹴られた腹が筋肉痛の様に痛む。ズキズキと痛みが走るたびに涙がこぼれる。こんなの嫌だ…誰か助けてよ。誰でもいいよ。口にしたい言葉はいつものどで止まってしまう。誰もいない空間でそんなことを口にする勇気すら、僕にはなかったのだ。

「児童相談所、身体を鍛えるメソッド、メンタルを強くする五つの習慣…。」帰宅した僕の日課は、いじめに対抗する手段をネットで検索すること。お察しの通り手段どころかヒントすら見つからない。しかし、いじめに対抗する手段が少しでもあるのであれば、そう思うとワクワクして手が止まらなくなってしまうのだ。

児童相談なんて頼ったところで仕返しがあるにきまってるし、いじめが完全に無くなるなんて思えない。ましてや身体やメンタルを鍛えるなんて…。

「ん？」

ネットサーフィンをしているとある物に目が止まった。

「これであの人は思い通りに、催眠アプリMarionette…？」

説明文を読んでみると、特殊な超音波を浴びせることで、特定の人物に催眠をかけられる、というものらしい。

「は、はは、あははははは！」

よくできたサイトと説明文に僕は大声で笑ってしまった。どう考えたって詐欺サイトとしか思えない、

名前を書いたら呪い殺せるタイプの漫画に影響でもされたのか？馬鹿らしくなった僕はそっとブラウザを閉じようとした。

「…。」

バカらしい、実にバカらしい。なのになんでこんなにもワクワクしているのだろう。子供でも分かる、催眠アプリなんて存在しない。でも僕は催眠アプリMarionetteをインストールすることにした。

「もし本当に思い通りにできたら…・」

龍治に復讐をする妄想が止まらない、ついでに面白くてニヤニヤしてしまう。早くインストールされないかそわそわする僕。

「インストールまであと9時間です」

「・・・・・・・・長すぎだろ！」

あ手にならない希望を胸に、僕は眠りについた。

学校に行くまでの電車で催眠アプリの取り扱い説明を見ていた。

「意外とちゃんとしてるんだなぁ…。」

本気にしているわけではないが、サイトを見ていくたびに作りがガチすぎてついつい見入ってしまっていた。

取り扱い説明は次の通りだった。

催眠アプリMarionetteの取り扱い説明

①催眠にかけられるのは一度に一人まで
②催眠状態は何でもいうことを聞く
③命令をしない限り待機状態になる
④催眠を解いた後の命令はできない
⑤催眠の解除はいつでも行えるが、催眠時の記憶はすべて消える
⑥催眠状態の維持時間は12時間
⑧このアプリで起きるどんな不利益も補償いたしません。

「まぁどこの詐欺サイトもこんなもんかぁ…。」
アダルトサイトを見てるとたまに踏んでしまうリンク先とかもそれなりに作りこまれてたりするし、似たようなもんか、と思いつつも不思議と不安感は無く、いまだに高揚感に浸っていた。

学校につき、授業と休み時間の寝たふりを繰り返す。昼休みにはいつもの様に龍治にパシられる。
龍治はいつも旧校舎で昼飯を食べる、いつも仲間たちと集まる癖に、昼飯の時だけは旧校舎で一人。
「はぁ・・・はぁ・・・。」

僕は毎回購買のパンや弁当を買ってはダッシュで旧校舎へと向かう。制限時間は5分、少しでも遅れれば・・・。

「2秒遅刻、正座で反省しろ」

たった2秒の遅刻でこれだ、旧校舎はもちろんボロボロでどこから入ったのか小石が沢山落ちている。

何かを敷くことも許さず、僕は小石の上に正座をする。

「っ！」

小石が足に食い込む、これまで何度も経験しているが、慣れることは一切ない。

「・・・・」

何処からか持ってきたマットに座り、スマホを見ながらもぐもぐと焼きそばパンを食べる龍治。もちろん龍治の気が済むまで僕は昼飯を食べることはできない。

prrrrrrrr

龍治のスマホから電話の着信音が鳴る。

「そのまま座ってろよ」

僕の事を睨みつけながらそう言って、龍治は僕に背を向けて電話に出る。

ふと、催眠アプリのことを思い出した。

「これ…試してみるか？」

正直半信半疑というか全く信じていないわけだったが、なぜか試したくなってしまった。
いつもの自分ならこんな変な挑戦絶対にできないのに。
「対象に催眠音波を使用しますか？」
［はい］［いいえ］

ガタンッ！
龍冶はスマホを落とし、ゆかにぺたんと腰をおとした。
「もしもーし？」
龍冶のスマホから聞こえる声にビクッとしつつも、静かに移動して電話を切る。
「ま、マジなのこれ？」
そっと龍冶の顔を覗き込む。
「え？」
龍冶はぽけーっとした表情で、顔を少し赤らめていた。こちらを見る表情もどこか抜けていて、いつもの怖い印象は消え去っていた。
気づけば僕の心臓はドッドッと音を立てているかの様に鼓動しており、緊張と驚きで頭が真っ白に。
「えっと、右手をあげて？」
龍冶はコクンと頷き右手を上げる。
「左手を上げて？」
同じようにコクンと頷き左手を上げる龍冶。
「マジだ…。」
それから十分くらいいろんなことを試した結果、命令への制限はほとんどなかった。魔法を使えだとか、龍冶自身ができない事は命令できないが、本人の持っている能力の範囲内であればなんでも命令に従う

ようだ。
「どんなことで復讐してやろうか…。」
「・・・・。」
待機状態の龍冶は常にぽけーっとした顔をする。ぺたんと座っている龍冶は上目遣いで僕を見つめ命令を待っているようだった。
ドキッ
「？」
なんで今ドキッとしたんだ？普通に考えておかしいだろ。そう思いつつも龍冶の目をもう一度見る。
ドキッドキッ…
気づけば僕は全身が熱くなり、さっきまでは別の理由でドキドキしているようだった。
「んっ…」
こっちをじーっと見つめてくる龍冶の顔がなぜか可愛く、そして愛おしく見えてしまう。僕はそっと龍

冶のほほに手を添えていた。
「あっつ。」
風邪で熱を出しているかのように熱い、催眠の副作用か？そんなことは一切かかれていなかったけれども。
「けっこうやわらかいんだな…。」
ほほに添えられていた手は唇にうつり、親指で優しくふにふにと触る。ドキドキと鼓動する心臓は更に速度を増していく。
自分の耳が真っ赤に染まっているのが分かるくらい顔が熱くなっていた。
「はぁッ…はぁッ…。」
なんだ、なんなんだこれ、どうして？俺にも副作用があるのか？
「ッ！」
怖くなった僕は龍冶をその場に残し走り去ってしまった。

自販機で水を買い、火照った身体を冷ます。
「あ、催眠アプリ起動したままだ。」
少しパニックを起こしていたせいで、龍冶の催眠を解除し忘れてしまった。
「どうしよう…。」
【催眠を解除しますか？】
僕の心を読んでいるかのようにログが表示される。
「これで、大丈夫なのか？」
とりあえずなんとかなった、そう思うと少し肩の力が抜ける。
「飯、たべよ。」
学校に来る途中で買ったおにぎりを食べ、僕は教室へと戻っていった。
どうやら遠隔操作でも催眠の解除ができるようだ。

多数決

無効票

5限目の授業が終わり、休み時間に入る。のんきに寝たふりをしようとしてると、スマホに着信が。
「今すぐ旧校舎に来い」
龍治からのメールが入っていた。
「そういえば…」
取り扱い説明にはこうあった。
「催眠の解除はいつでも行えるが、催眠時の記憶はすべて消える」
つまり、僕からすれば数十分の間龍治で遊んでいたわけだが、龍治からすれば突然僕がいなくなり逃げだした形になってしまう。
「うわぁ…最悪だ。」
重い腰を上げつつ、僕はダッシュで旧校舎へと向かう。
「お前、俺になにをした？」
え？催眠アプリバレた？そういえば相手にはバレないとか書いては無かったような…。いやでも記憶は消えるわけだから…。
「いや、えっと。」

頭が真っ白で何も考えられない。
「ちっ、気づいたらここで横になって今さっき目が覚めた。お前パンに何か盛ったか？」
「ち、ちがうよ！僕じゃ…。」
龍冶はいつもの目で僕を睨みつける、この目で睨まれると僕は固まってしまう。
「お前…。」
龍冶は僕の胸ぐらをつかみ、怒りをあらわにする。
「ひっ！」
恐怖に飲み込まれそうなその時、僕は握りしめていたスマホを誤って操作してしまう。
ガタッ
龍冶はその場に座り込み、ぽけーっとした顔でこちらを見つめてくる。
「間違って催眠アプリを起動しちゃったのか。」
とりあえずは助かった。
「…。」
さっきまでの迫力はどこへやら、顔を赤らめ、少しうるんだ目でこちらを見つめる龍冶は、どこか小動物の様で、母性本能？みたいなものを刺激してくる。
「さっきも思ったけど、肌綺麗だな…。」
龍冶の肌はすべすべでシミ一つない、雑誌やテレビで見るモデルや女優の様な肌をしていたし、シルク

の様な質感とはよく言ったもので、まさにそんな肌触りだ。
「龍治…服、シャツ、脱いで」
自分でもなんでこんな命令をしたのか分からなかった、しかし自分を止めることなんてできなかった、
いや、止めようなんて一切思ってもいない、僕は自分の欲求に正直になる。
龍治はコクンと頷くと、シャツのボタンを一つずつ外す。荒々しい性格の龍治を忘れさせるよう、繊細な手つきでボタンをはずしていく龍治に僕は欲情していた。
「はぁッ…はぁ…。」
息が荒くなる、筋肉質の胸は少し厚みがあり、程よくやわらかい。
「すご…。」

ビクッ！

掌が乳首に触れると、龍治は身体を震わせていた、感じてるのか？

クリクリッ

「あ…んっ。」

龍冶は甘い声を出す。さらに顔は赤くなり熱を帯びる。

ちゅっ、ちゅる…

僕は龍冶の胸に抱き着き、乳首に吸い付くかの様に舐め始めた。柔軟剤なのか香水なのか、甘い匂いと汗の匂いが混ざりさらに興奮が高まっていく。

「あっ、あぁ！」

ビクビクッと身体を震わせながら龍冶は身体をよじらせていく。しかし僕から逃れようとはせず、ただ好きなように舐められる。

「はぁ…はぁ…龍冶、これ、舐めて？」

頭が真っ白で今の状況を把握できているのかもわからない、催眠状態を解除した後につて一瞬考えていたが、気持ちよくなりたいという欲求と、もっと龍冶の身体に触れたいという欲求がすべて邪魔してくる。ただ頭に流れてくるのは

犯したい

それだけだった。

ジュっ…ジュポ…ちゅっ…

「すごっ…なにこれめっちゃ気持ちい。」

龍冶は僕の一物を必死に舐める、龍冶の口の中は唾液と僕から出る液でとろとろになっており、溶けてしまうんじゃないかというくらい熱く火照っていた。

「もっと舐めて、気持ちよくして。」

ぐぽっ…ぐぽっ…じゅ…

「も…だめ…あぁ！」

「んんっ！」

びゅるッ！びゅるるるる！

あまりにも気持ちよすぎてそのまま出してしまった。

「こぼさないで、全部飲んで」

「んっ、んぐっ…。」

龍冶は僕から出た精液を残さず飲み干す。僕の命令にけなげに従う龍冶は愛おしく見え、僕はさらに欲情してしまう。出した瞬間収まったかと思った性欲は更に勢いを増し、僕の一物はまたガチガチに固まっていた。

「ん、ちゅっ、あむ…っはぁ…」
龍冶と僕は舌を絡ませながらキスをする、お互いの唾液が行き来し、更に口内はドロドロになって行き、それを感じれば感じるほど僕は興奮していく。
シュッシュッシュ…
僕は龍冶の一物を手でしごく。
「あっ、あぁっ！んっ！」
龍冶はまるで女の子の様に喘ぎ、身体をよじらせていく。
「脚ひらいて」
龍冶は頷き、脚を開くアダルトサイトや成人雑誌などでしか見たことがないM字開脚にドキドキが止まらない。
「こんな風になってるんだ。」
にゅぷ…
僕は人差し指をそっと龍冶のアナルに押し当てる。

「ん、ちゅっ、あむ…っはぁ…」
龍冶と僕は舌を絡ませながらキスをする、お互いの唾液が行き来し、更に口内はドロドロになって行き、それを感じれば感じるほど僕は興奮していく。
シュッシュッシュ…
僕は龍冶の一物を手でしごく。
「あっ、あぁっ！んっ！」
龍冶はまるで女の子の様に喘ぎ、身体をよじらせていく。
「脚ひらいて」
龍冶は頷き、脚を開くアダルトサイトや成人雑誌などでしか見たことがないM字開脚にドキドキが止まらない。
「こんな風になってるんだ。」
にゅぷ…
僕は人差し指をそっと龍冶のアナルに押し当てる。

「うぐっ…あぁっ…。」
龍治はより一層女の子の様な声になり喘ぐ。
にゅるッ…ぬちゅっ、ぬちゅっ…
龍治のアナルからは液が漏れだし、スムーズに指が入っていく。
ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ！
「ぁぁ！ああっ！んんうぅ！」
激しく指を動かすたびに龍治の身体はビクビクと動き、同じタイミングで声が漏れだしていく。
「なにこれ、楽しい…！」
にゅっ…にゅちゅっ…ぬじゅッ…ジュクッ…じゅぽっ！
どんどん音に水っぽさが混ざり、音は激しくいやらしさを増していく。
「もうっ…我慢できない。」

グッ…

龍治の太ももに手をかけた僕は、更に脚を広げ、自分の一物をアナルに押し当てた。

ぬちゅ

「っ、きつっ…」

龍治のアナルは僕の一物を押し返す、それでも僕は無理矢理押し当て、龍治の中へと一物を押し込んだ。

ぬぷっ…ぬちゅッ…ぬちゅゅッ…

「あぁっ！あっつ、きもちいっ…。」

ぐちゅっ、ぐちゅっ！

入った瞬間から僕は何も考えられなくなり、ひたすらに腰を振っていた。

「あっ！あぁ！うぐっ、あぅ！」

龍冶はただ喘ぎ完全に僕に身をゆだねる。抵抗することなく僕の一物を受け入れている龍冶はまさに僕の、僕だけの玩具のようだった。

「はっはっ…あっ…きもちっ…んっ！」

ばちゅっ！ばちゅん！じゅぽっ！

「あああああ！あん！あぁ！」

「また…イクッ！」

びゅるるるる！びゅる！

「っはぁ！はぁ…はぁ…っちゅ…んちゅ…んっ。」

中出しながらキスをする。絡む舌が熱く、とろけそうになりながら、段々と収まっていく一物がにゅるんと龍冶のアナルから滑り出てくる。

「んっ…。」

アナルからは僕の精液が溢れ、マットにシミを作っていく。

「これ、どうしよ…。」
賢者タイムというものか、急に冷静になり、催眠状態を解除した後のことが怖くなってきた。
「…。」
上目遣いで僕を見つめる龍治。
「くっ！」
なんでこんなに可愛いって思うんだ！おかしいだろ！こいつは俺をいじめたクソヤンキーだぞ！
「…、龍治身体をきれいにして服着て。家まで帰って。」
龍治はコクンと頷き準備を始めた。ふとスマホを見ると5限目はとっくに終わっており、遠くから休み時間のおわりを告げるチャイムが聞こえていた。
「やばっ！こんなに時間経ってたのか！」
渡したハンカチで身体を拭き服を着る龍治を横目に、僕はいそいそと旧校舎を出ていった。